

平成 30（2018）年度 学生満足度（学生生活実態）調査結果

平成 31 年 3 月

I R委員会・学生委員会

【調査結果の概要】

他大学の満足度調査における「教育内容への満足度」などは、前期に実施した学修行動調査で調査済みである。調査に協力する学生の負担も勘案し、今回の調査は、過去 2 回（H26、H28）の学生生活実態調査の主要項目を引き継ぐこととした。一方、調査方法を moodle 上に設定した Web アンケート方式に変更した。学生委員会からの考察文を「1）全学の分析」として記入し、当委員会では在籍学科の情報に紐づけた学科別分析を行って、「2）学科間比較」として加筆した。

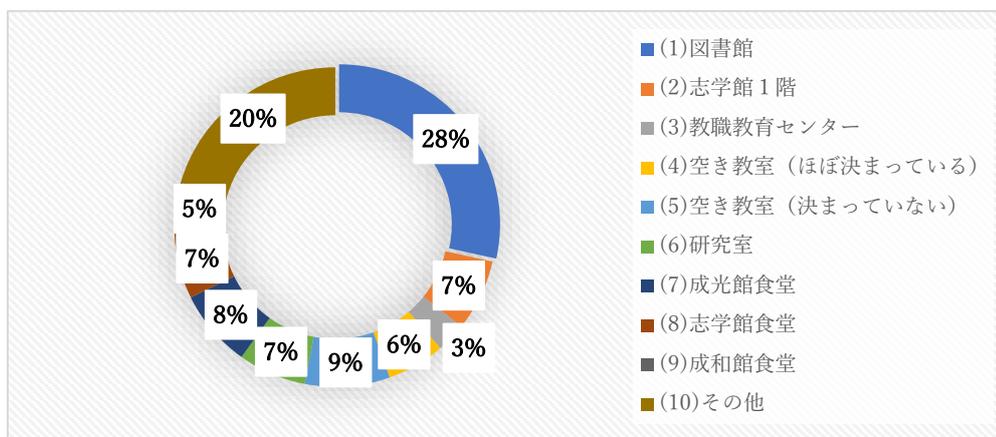
【調査の回収状況】

	対象者数 (人)	回答者数 (人)	回答率 (%)
日本語日本文学科	214	151	70.6
歴史文化学科	218	155	71.1
幼児教育専攻	491	218	44.4
学校教育専攻	363	213	58.7
特別教育専攻	132	64	48.5
人間社会学科	336	290	86.3
スポーツ健康学科	463	347	74.9
薬学科	860	624	72.6
全学	3077	2062	67.0

【I：自習場所】

問 あなたが自習場所として利用するのは、主にどこですか。

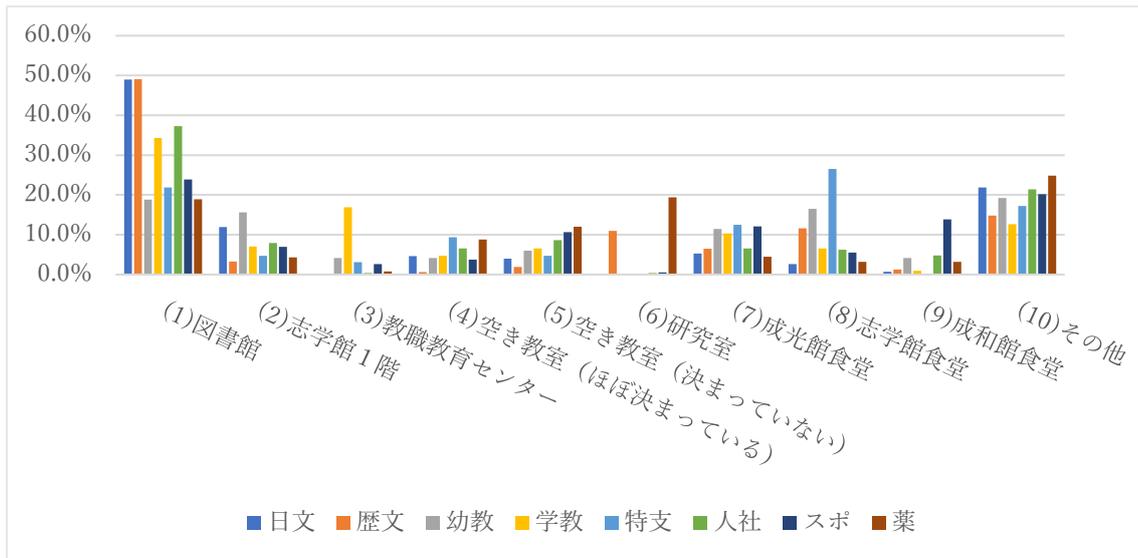
1) 全学の分析



<考察>

本質的に自習を行なうスペースが確保されていない。

2) 学科間比較



<考察>

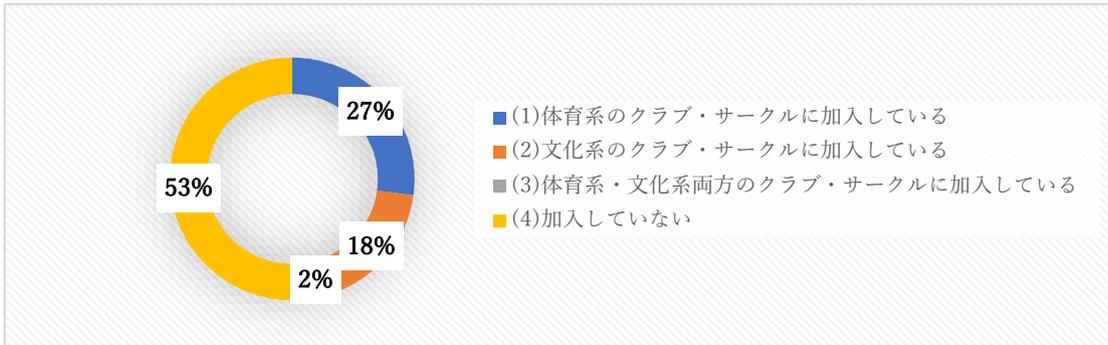
日文、歴文は「(1)図書館」で自習する学生が多い。「(3)教職教育センター」を利用しているのは学教が圧倒的に多い。「(6)研究室」で自習しているのは歴文と薬学だけである。この傾向は学習内容と授業教室に関係しているからだと考えられる。一方、幼教の学生は、「(2)志学館1F」や「(8)志学館食堂」利用者が多い。幼教の学生はピアノの練習・授業で音楽館を使うことが多いため、近くにある志学館の利用者が多いのではないかと思われる。同様に授業教室との距離という観点でみると、特支の学生の場合、「(8)志学館食堂」の隣に「特別支援教育実践研究センター」があり、やはり近くの施設「(8)志学館食堂」の利用者が多いのではないかと考えられる。

大学が自習場所と想定していない場所「(10)その他」を選んだ学生が、どの学科でも約2割あり、「(1)図書館」に次いで割合が多いことが判る。推測ではあるが、カフェやイトインなど学外の施設を利用しているものが、「その他」を選んだ可能性がある。コーヒーを飲みながらPCでレポートを作成するといったライフスタイルの変化にも配慮しながら、自習場所の整備が待たれる。

【Ⅱ：課外活動】

問 課外活動団体に加入していますか。

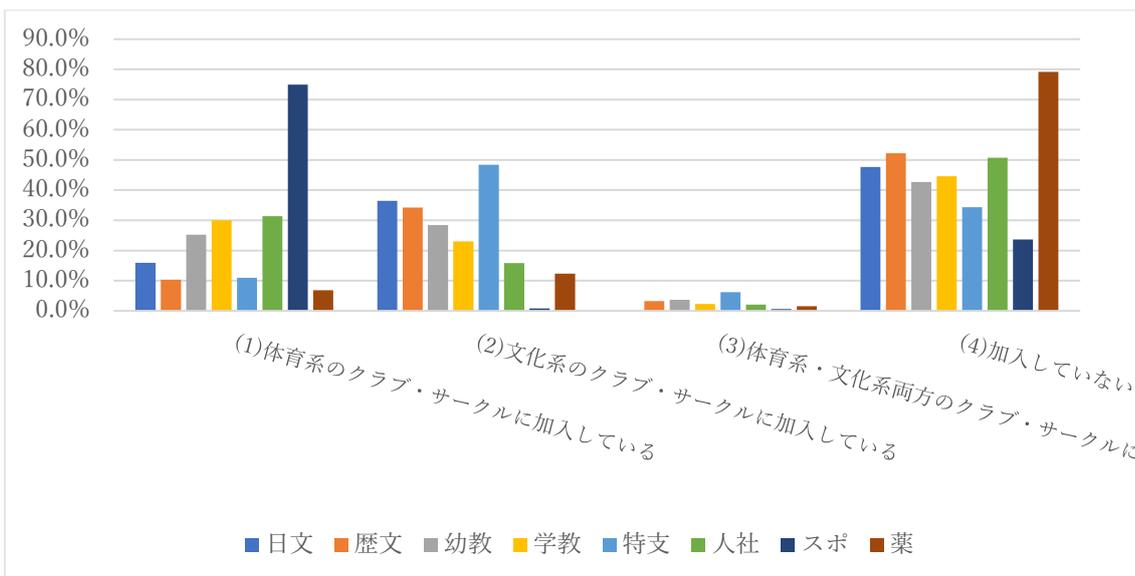
1) 全学の分析



<考察>

全体的な比率においては、加入者数が多く、その利用度も高いと考えられるが、活動自体との関係性について、このデータで判断することは難しい。

2) 学科間比較



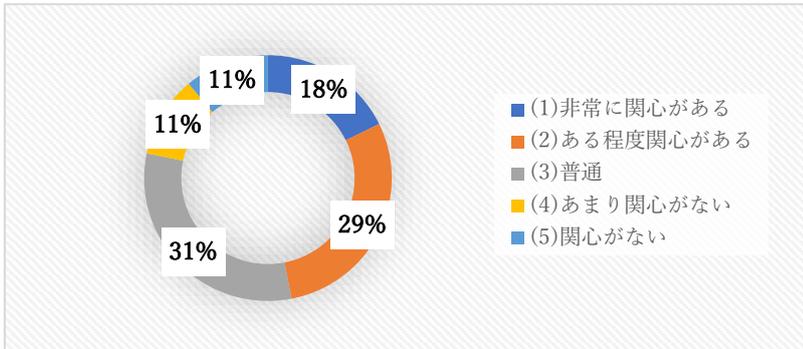
<考察>

スポ健の学生は8割の学生が「(1)体育系のクラブ・サークルに属している。また薬学は「(4)加入していない」学生が8割に達する。これは学科の特徴をよく反映している。特に薬学では2回生以上で専門内容の授業が始まると、授業についていけなくてたいへんだと指導されているため、それがはっきりと表れている。一方、スポ健、薬学以外の学科で「(4)加入していない」学生が5割近くいるが、単純に課外活動への参加を促すのではなく、ボランティア活動やアルバイトなどとの関連を個人レベルで調べる必要があると思われる。

【Ⅲ：ボランティア活動】

問 ボランティア活動に関心はありますか。

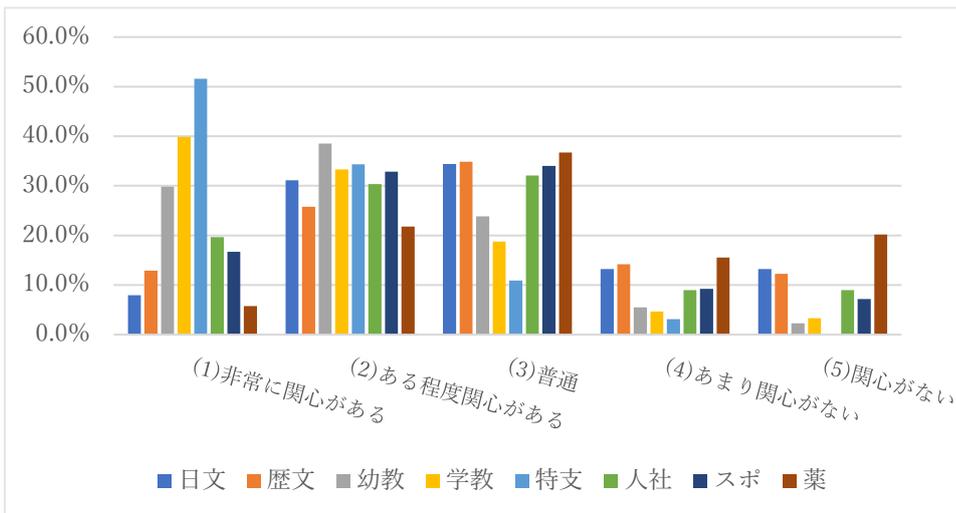
1) 全学の分析



<考察>

ほぼ半数の学生がボランティアに関心を示していると言える。ボランティアに関して、先進国においてはその評価が高まる傾向にあることから、本学においても今後ボランティアへの関心を向上させる施策が必要と考えられる。

2) 学科間比較



<考察>

教育学部、特に学教と特支の学生はボランティア活動に高い関心を寄せている。自治体が学校ボランティア活動を推進し、教員養成系大学との連携に力を入れていることもあって、学生の関心は非常に高い。さらに大阪市では採用選考テストでボランティア加点を公告している。試験要項で「放課後の学校での学習支援や、こども食堂やこどもの居場所づくりにおける学習支援等にボランティアとして参加した学生等に、教員採用選考テストで加点する（大阪市）」と明記されており、教員を目指す学生のボランティアへの関心を他学科と同じ位置づけで評価することは妥当ではないと考えられる。ボランティアに関する授業科目を設置し、専門必修科目とするような改革も必要であろう。ボランティア活動が就職に直結する学科とそうしたメリットの少ない学科の間で差が顕著になるのは当然である。

問 ボランティア活動に参加したことはありますか。

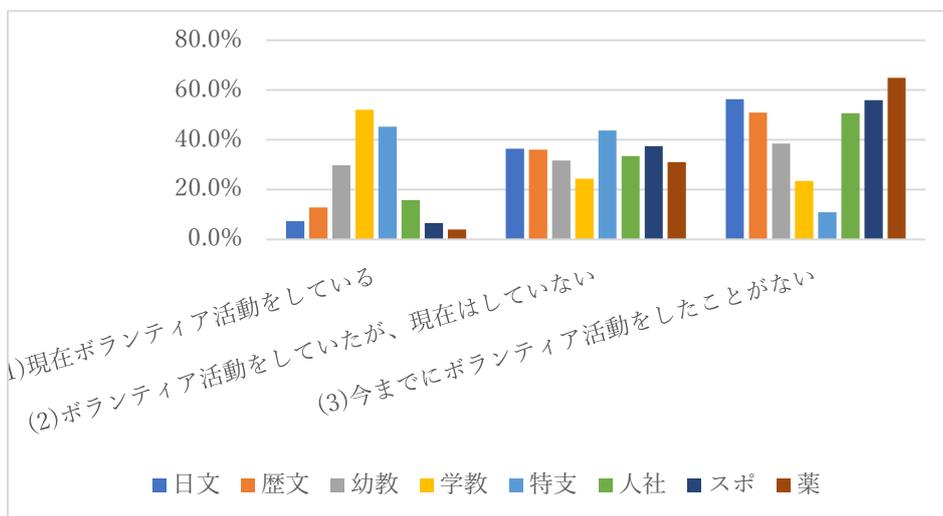
1) 全学分析



<考察>

ボランティアの関心度と実行度の数値はデータが一致する。このことからボランティアを行なった学生はボランティアに関心を抱く傾向があるものと推測できる。よって、学生のボランティアへの関心度を上げる施策として、まずボランティアを経験させてみるということも一例として挙げることができる。

2) 学科間比較

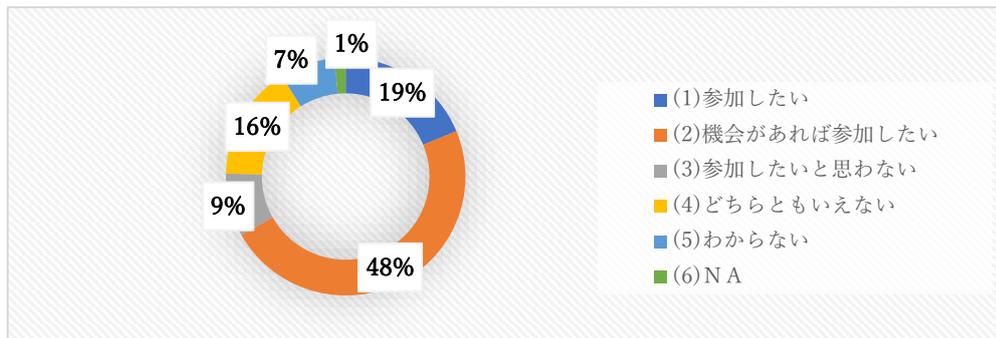


<考察>

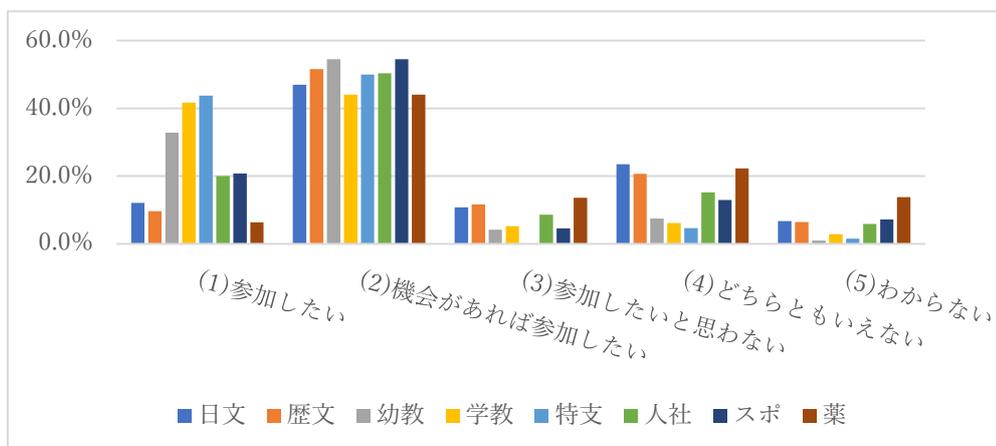
前の問と同じ傾向が表れている。教育学部の学教と特支は、活動中と休止中を合わせると、8割に達する。特に特支は未経験者が1割であり、専攻の特性を反映している。学教と特支では、教採合格へのインセンティブともなっており、他学科に比べて圧倒的に高いのは納得できる。

問 今後ボランティア活動をしたいと思えますか。

1) 全学分析



2) 学科間比較



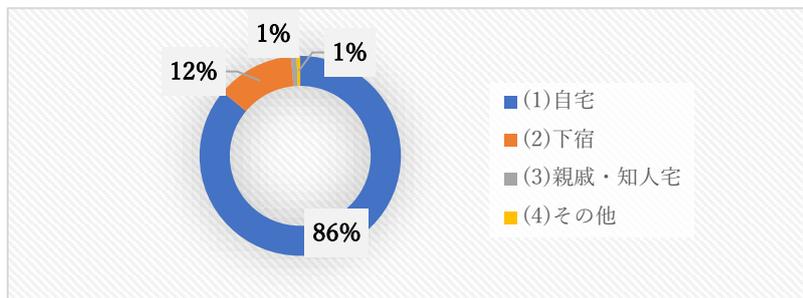
<考察>

「(2)機会があれば参加したい」と考えているものは、いずれの学科でも 4~5 割に達しており、ボランティア活動に対するプラス・イメージは強い。やはりこの質問でも、教育 (3 専攻) は他学科と比べて「(1)参加したい」という回答が多く、ボランティア活動全体に対する意識が高いことが判る。

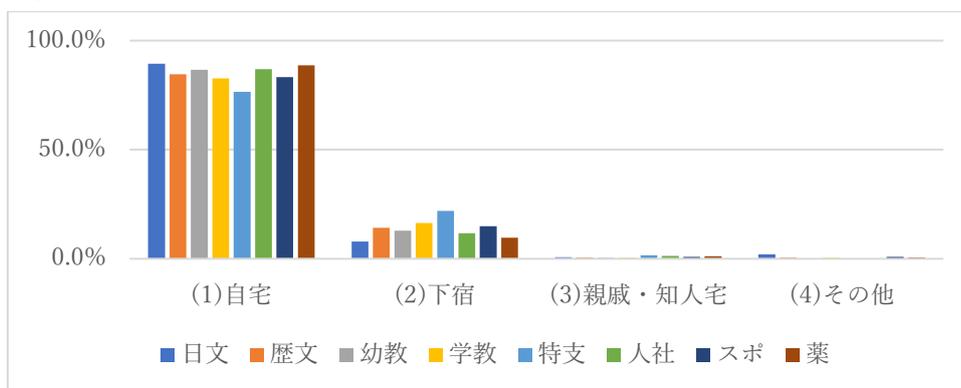
【Ⅳ：通学】

問 通学区分は以下のどれですか。

1) 全学の分析



2) 学科間比較

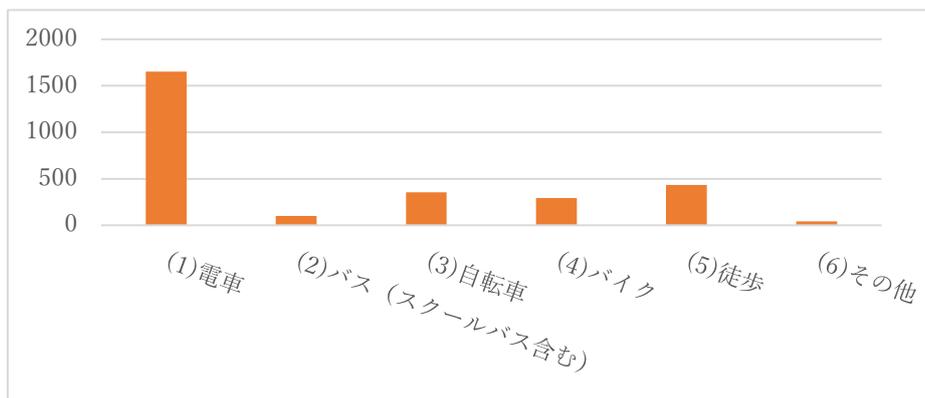


<考察>

いずれの学科も「(1)自宅」通学がほぼ8割で、地元出身者が多いことが判る。

問 通学手段は以下のどれですか。

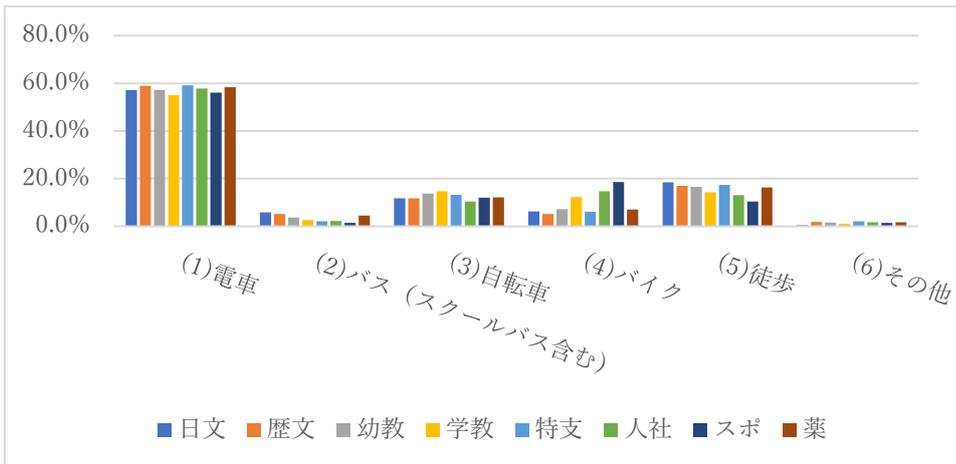
1) 全学の分析 (回答人数)



<考察>

自転車、バイクを通学に利用している学生は 647 名に上る。現在大学はバイク利用者に対する交通安全指導の機会を設けているが、昨今自転車に関する問題点も指摘されていることから、この件についての指導機会の提供も検討すべきではないかと考える。

2) 学科間比較 (各学科の通学手段合計値に対する%で比較)

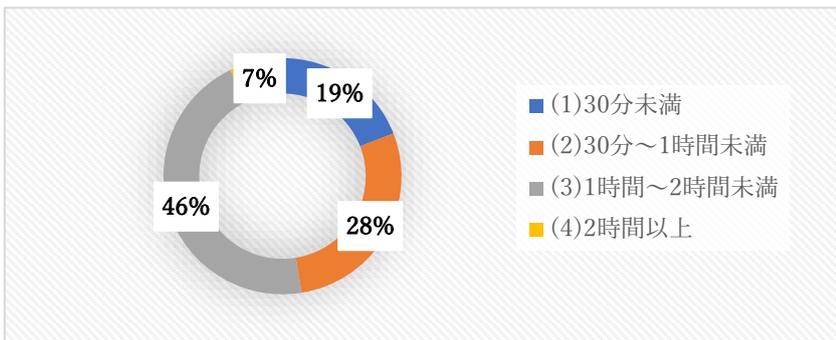


<考察>

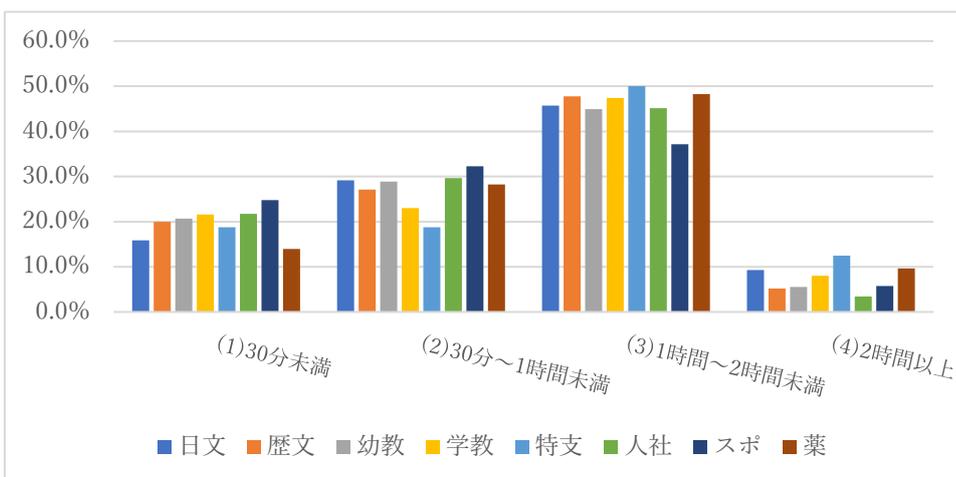
いずれの学科も「(1)電車」が約6割で、地元の駅まで「(5)徒歩」、「(3)自転車」、「(4)バイク」を組み合わせ通学している学生が多いことが窺える。

問 通学にかかる時間はどれくらいですか。

1) 全学の分析



2) 学科間比較

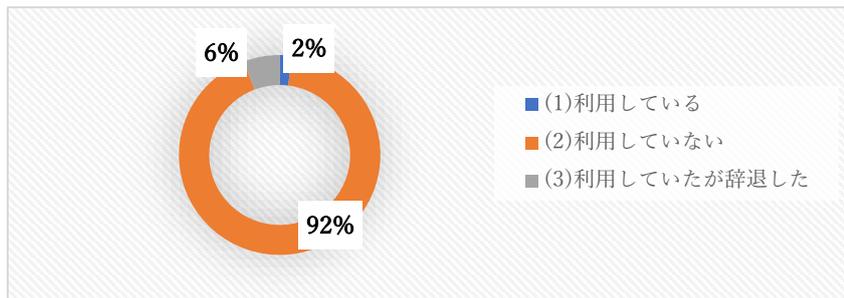


<考察>

特に大きな違いは見当たらない。特支の学生の通学時間は、「(2)30分~1時間未満」の割合が少なく、やや長めの傾向がある。

問 スクールバスを利用していますか。

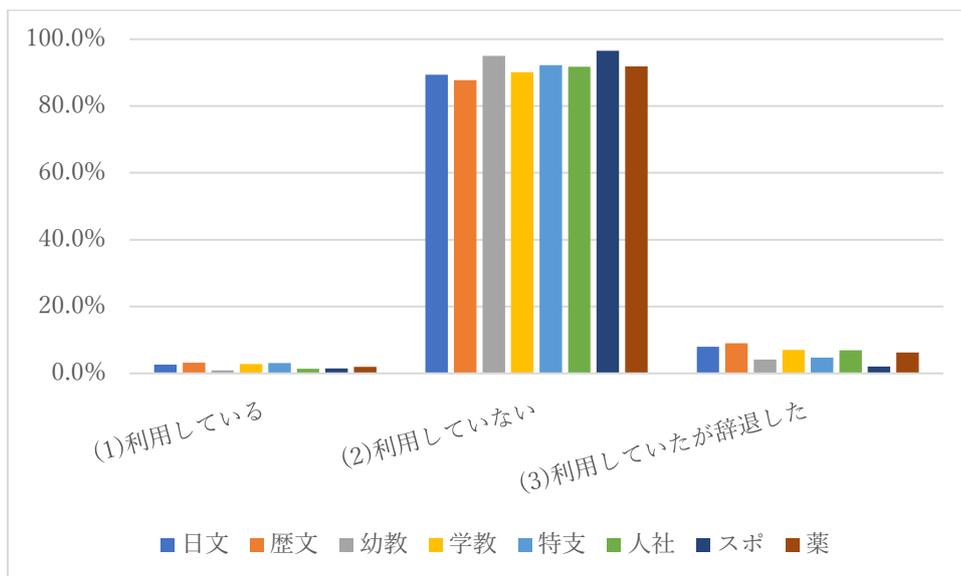
1) 全学の分析



<考察>

一概にスクールバスの利用に関しては、言及することはできない。その理由として、登録制であり課金制であることが挙げられる。他大学の例として、課金しない、乗る度に支払う等の施策を講じれば、利用度は向上すると考えられる。現状制度として存在している以上、どのようにすれば利用度が向上するのか検討する必要がある。

2) 学科間比較



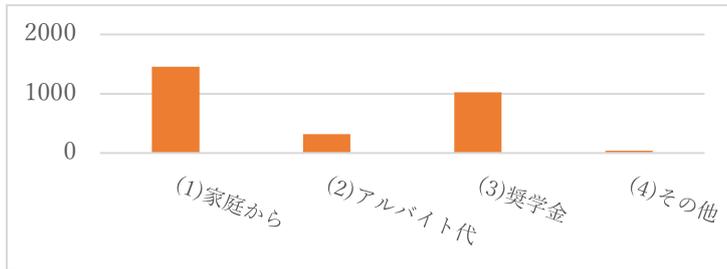
<考察>

学科間の差異はみられない。

【V：アルバイト】

問 学費納入手段はどれですか。(複数回答可)

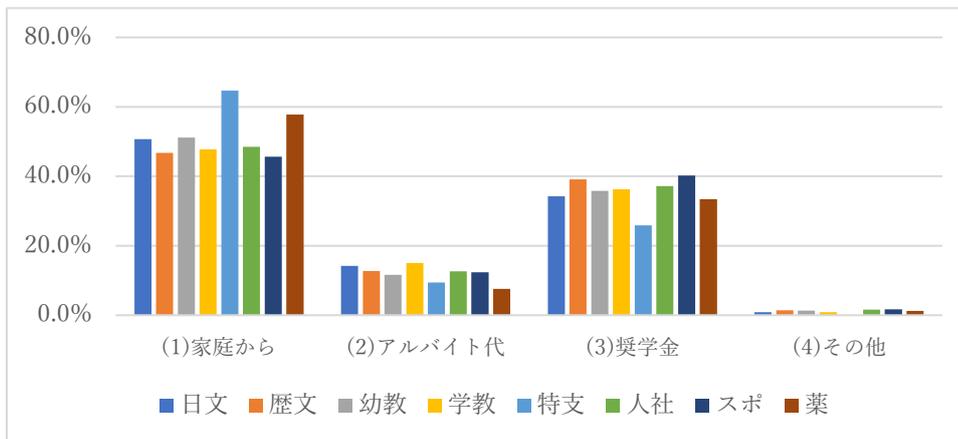
1) 全学の分析 (回答人数)



<考察>

奨学金が占める割合がかなり高く注目に値する。大学・学園としては、卒業後の負担が少ない、あるいは社会人における業績において、それを消滅・減少させる制度設計の模索も重要ではないかと考察する。

2) 学科間比較 (各学科の学費納入手段合計値に対する%で比較)

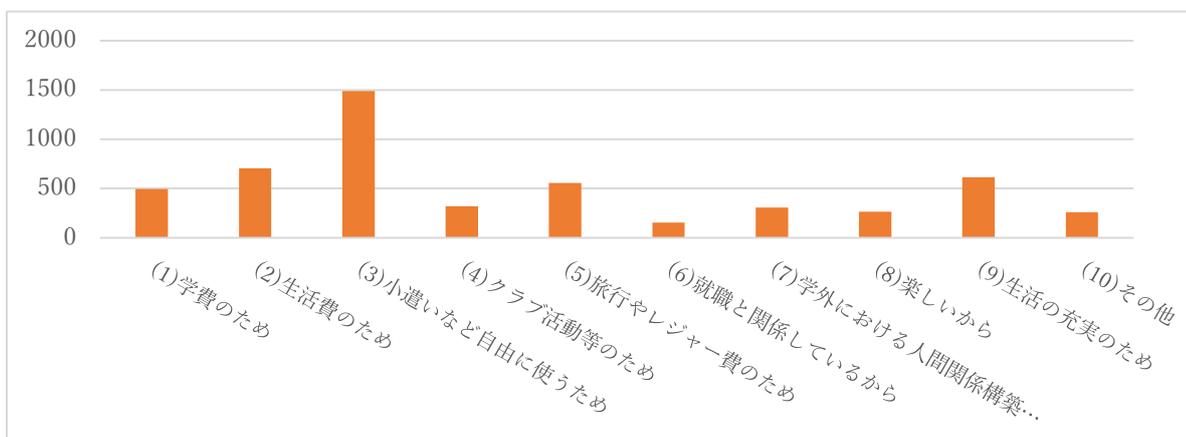


<考察>

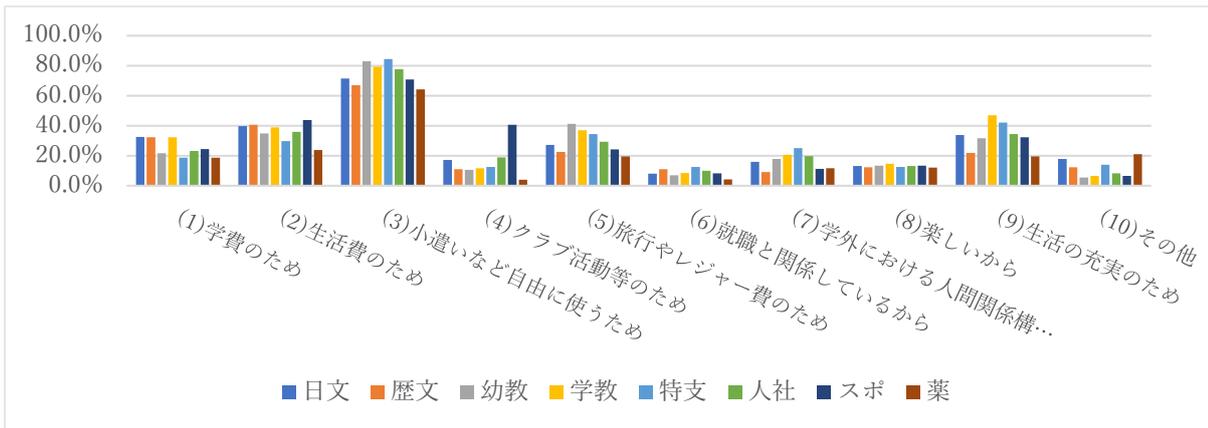
特支、薬学で「(1)家庭から」の仕送りの割合が多いのが目立つ。通学時間が長いことや、後の問いのアルバイト時間が他学科に比べて短いことと関連があるのかも知れない。

問 アルバイトをする理由は何ですか (複数回答可)。

1) 全学の分析 (回答人数)



2) 学科間比較（各学科のアルバイト理由の合計値に対する%で比較）

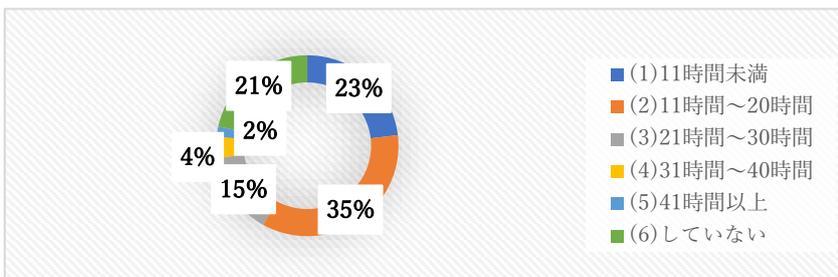


<考察>

スポ健では「(4)クラブ活動等のため」という理由をあげている学生が多い。学科の特徴を反映していると考えられる。

問 1週間あたり何時間アルバイトをしますか。

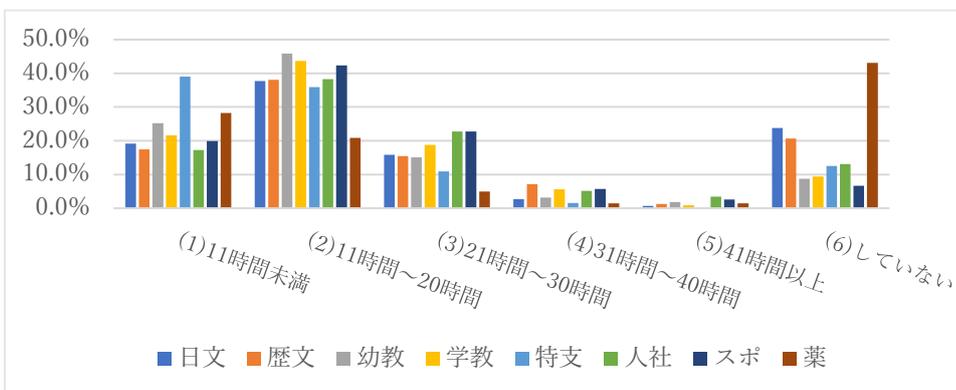
1) 全学の分析



<考察>

アルバイトは、社会の状況を実際に体験する上で有効だが、学業や生活に支障をきたすことになるとその問題性を考えなければならない。今回得たデータから平均値、最頻値、中央値を算出して、大学が適切と考える時間数を考えることも必要であろう。日本学生支援機構の「平成 28 年度学生生活調査（30 年 3 月）」には、昼間部大学生の週間平均生活時間の内訳で、「アルバイト・定職」に「11 時間～20 時間」従事しているもの（11～15 時間と 16～20 時間を加えた値）は 33.4%と報告されており⁽¹⁾、時間区分のうちで最も割合が高い。本学学生のアルバイト時間は標準的と考えられる。

2) 学科間比較

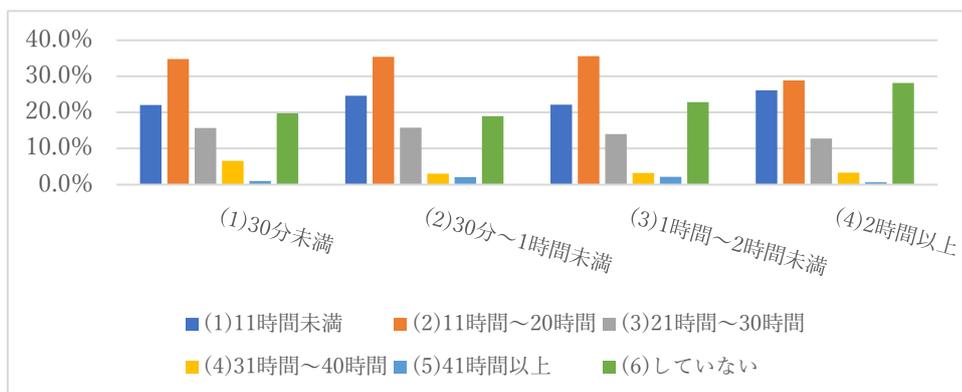


<考察>上記アルバイトに関する2つの質問を関連付けて、考察する。

薬学の学生の4割がアルバイトを「(6)していない」のは、課外活動団体に所属している学生が少ないのと同じで、「授業についていけなくなる」という理由が大きいと考えられる。日文・歴史の学生も2割がアルバイトを「(6)していない」が、この要因については詳細な調査が必要である。さらに、特支の学生は「(1)11時間未満」と答えたものが目立って多い。ボランティア活動への参加・意欲が高かったことと併せて考えると、アルバイトをしている余裕がないのかも知れない。その原因を調べる必要がある。一方、薬学科以外では、「(2)11時間～20時間」のアルバイトをしている学生が4割前後いる。その目的はいずれの学科でも、「(3)小遣いなど自由に使うため」、「(9)生活の充実のため」、「(5)旅行やレジャー費のため」という理由が上位に並ぶ。同時に、課外活動団体への参加、ボランティア活動への関心のデータと併せて考えると、家庭学習の時間確保が困難であるのは明白である。現在の生活を豊かにするために学習よりもお金儲けの時間を費やそうという志向が顕著になっている。個人レベルで、1週間の時間の使い方を調査し、将来を見据えた生活設計を指導する必要があると思われる。

3) 通学時間の長さとおアルバイト時間の関連

全学の分析

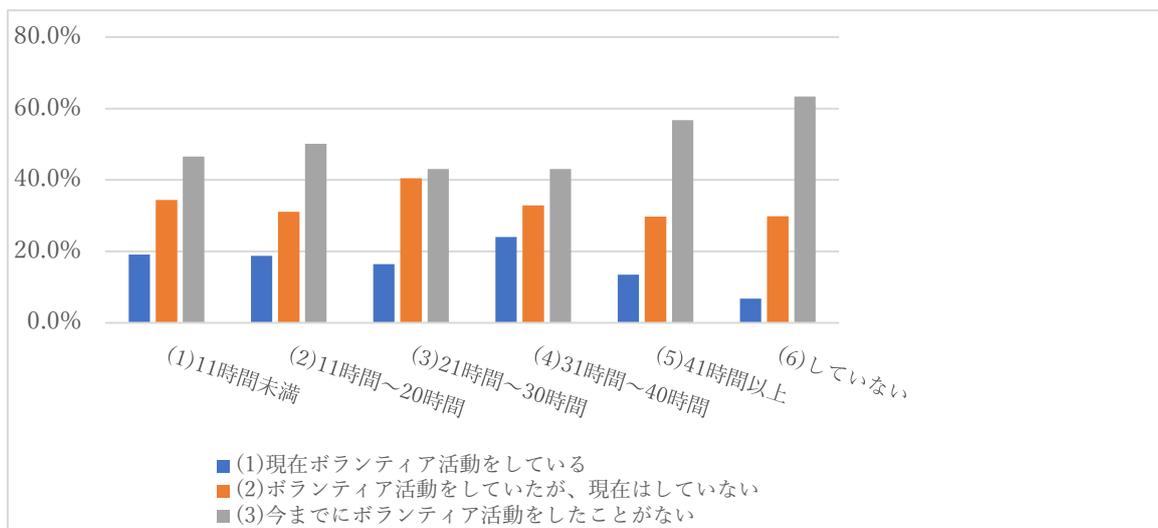


<考察>

同じ通学時間のグループ内で、各アルバイト時間の人数を%で表して比較し、通学時間とアルバイト時間の関連を調べた。その結果、通学時間の長さとおアルバイト時間の長さには、特に関連がないことが判った。いずれの通学時間グループにおいても、1週間あたり「(2)11時間～20時間」のアルバイトをしている学生の割合が最も多い。これは、土日に1日8時間フルタイムで働いていることになり、大きな問題である。「なぜ社会は週休2日の働き方をするように変化してきたか。」を教える必要があるだろう。次の調査では、アルバイトをする曜日と、時間幅を細かく分割して調べたい。

4) ボランティア活動実績とアルバイト時間の関連

全学の分析



<考察>

アルバイトを「(6)していない」学生のうち、「(1)現在ボランティア活動をしている」と回答したのは、6.7%であった。つまり、アルバイトをしていない学生は、現在ボランティア活動もしていないことが判る。一方、「(1)現在ボランティア活動をしている」と回答した学生のうち、アルバイト時間について(1)～(5)を選んだ学生は90.9%であり、現在ボランティア活動をしている学生は、アルバイト（時間の長さを考慮しない）もやっけて、両立していると考えられる（学科の違いは考慮していない）。

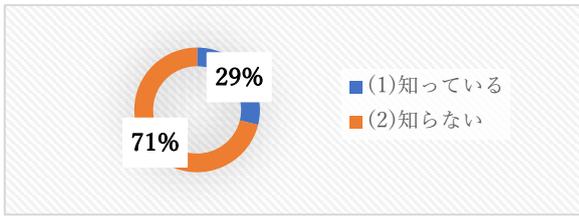
次に、アルバイトを「(4)31時間～40時間」している学生の約2割（最も割合が多い）が「(1)現在ボランティア活動をしている」としている。つまり、アルバイトとボランティア活動（活動時間の長さは問わない）の両方を積極的にやっけてることになる。ただ、「ボランティア活動とは別に1週間に31～40時間のアルバイトも行っている」とは考え難く、「有償のボランティア活動を31～40時間やっけて」と解釈した方がよいであろう。この回答をした人数はわずか19名で、ごく少数だといえる。

今後は、1週間あたりのボランティア活動の時間を尋ねること、アルバイトの時間幅を細かく設定して、これに学習成績を関係付けて分析し「授業時間外に学習以外の活動に積極的な学生は、成績が芳しくない。」といえるかを検証して、個別学修指導に適用すべきだ。

【VI：食生活】

問 食堂の運営に大学が補助しているのを知っていますか。

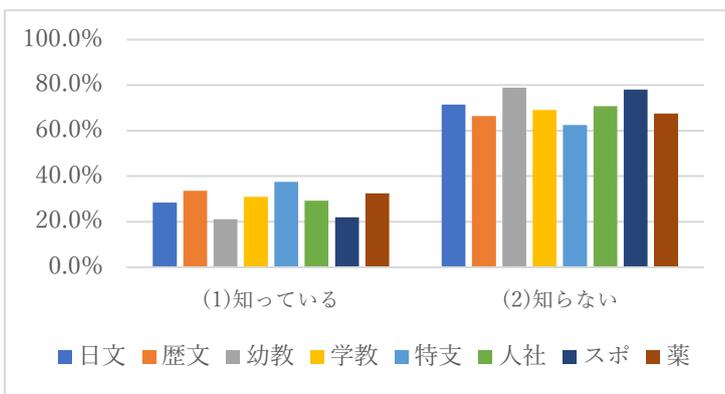
1) 全学の分析



<考察>

広報が不足しているので、改善すべきである。

2) 学科間比較

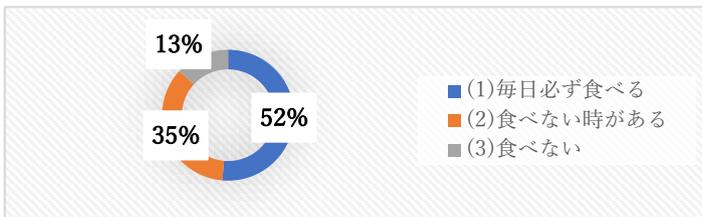


<考察>

いずれの学科でも知っているのは約3割で、学科間の違いは見られない。

問 朝食を食べていますか。

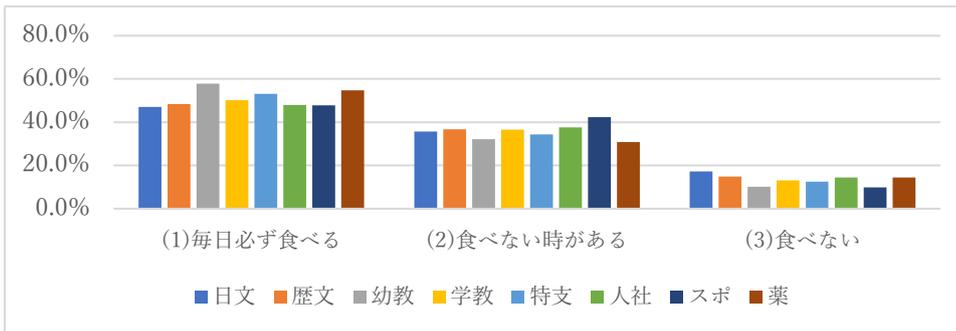
1) 全学の分析



<考察>

食育に関して、このデータから啓発する必要があると考える。

2) 学科間比較

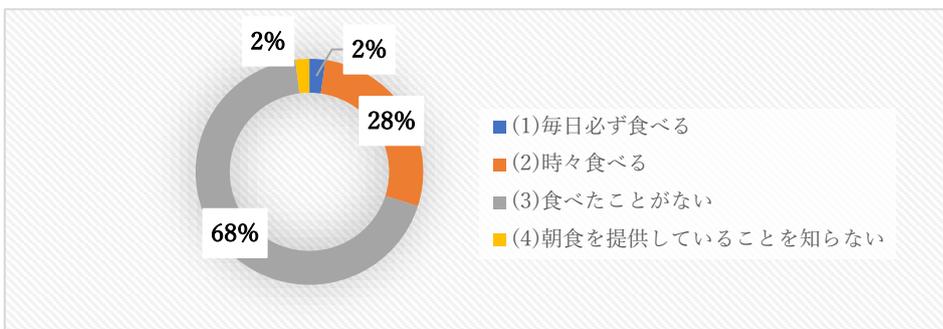


<考察>

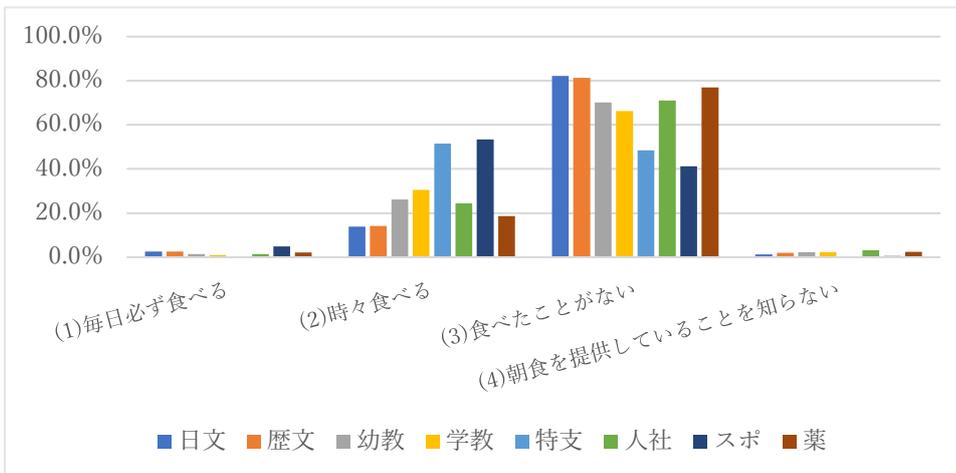
学科間の違いはみられない。

問 食堂の朝食を食べたことがありますか。

1) 全学の分析



2) 学科間比較



<考察>

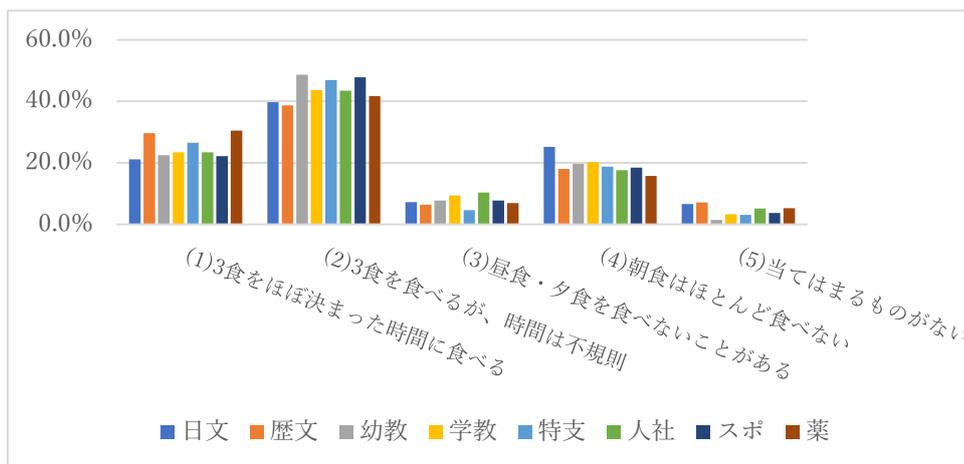
食堂の朝食は50食限定であり、もともと全学生が対象になっているものではない。スポ健の回答人数が347人であり、その5割が「(2)時々食べる」と回答し、「(3)食べたことがない」という学生が4割で最低であることから、食堂の朝食を食べているのはスポ健の学生であることがうかがえる。運動系クラブで、朝の練習をした後に朝食をしっかりとっているのであろう。この結果から、食堂の朝食を全学科に広報することを進めるのであれば、朝食の提供数を増す、広報の仕方を変えるなどの工夫が必要ではないだろうか。

問 3食（朝・昼・夕）きちんと食べていますか。

1) 全学の分析



2) 学科間比較



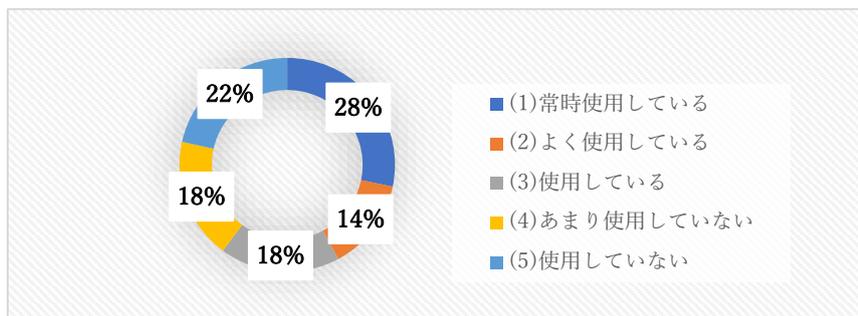
<考察>

いずれの学科も「3食を食べる」と回答したものが6~7割で、「(1)3食をほぼ決まった時間に食べる」としたものは2~3割にとどまった。一方、「(4)朝食はほとんど食べない」と回答したものが2割弱おり、健康への影響が懸念される。学科間の違いはみられない。

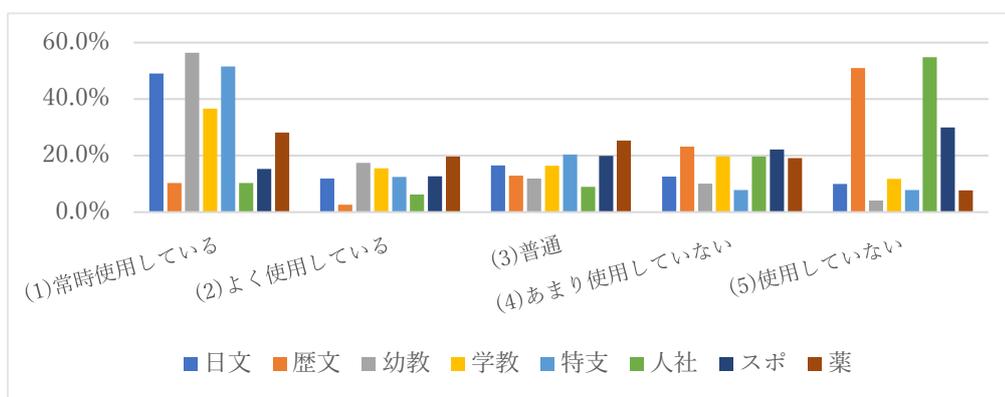
【Ⅶ：個人ロッカー】

問 個人ロッカーを使用していますか。

1) 全学の分析



2) 学科間比較

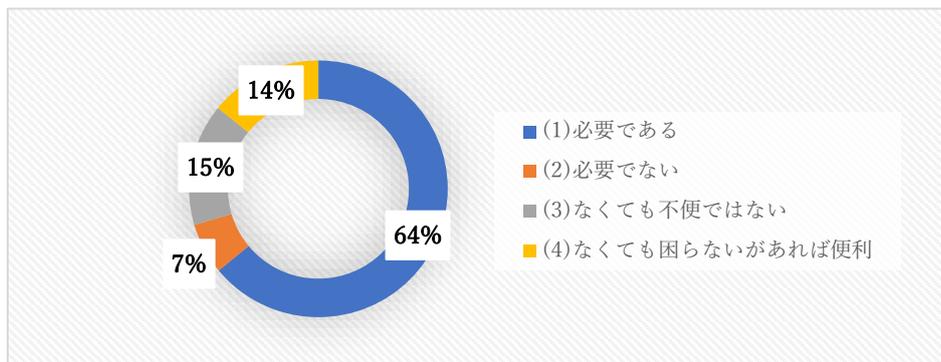


<考察>

日文、教育（3専攻）は「(1)常時使用している」学生が5割前後あり、他学科との間に大きな差がみられる。一方、歴史と人社は5割の学生が「(5)使用していない」と回答している。これについてはその原因を調べる必要がある。

問 個人ロッカーは必要ですか。

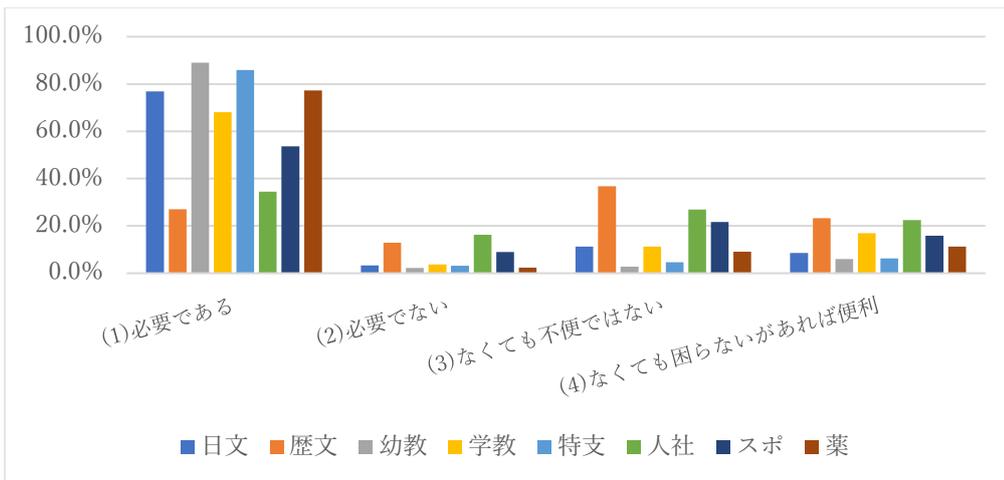
1) 全学の分析



<考察>

全学的には、ロッカーが「(1)必要である」という回答が多い。

2) 学科間比較



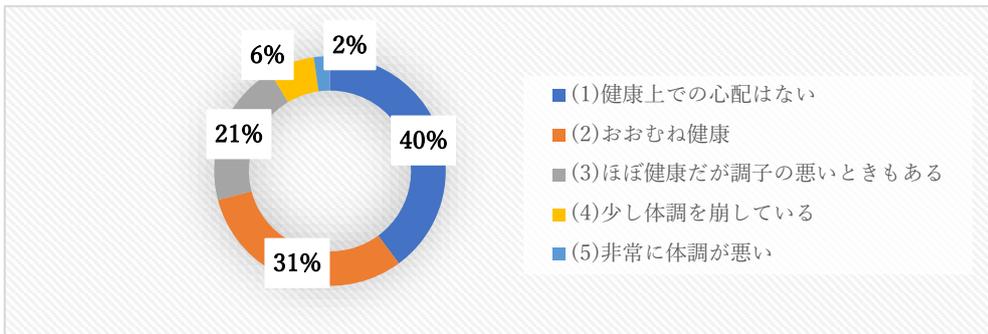
<考察>

前問で「(1)常時使用している」学生の多い日文、教育はロッカーが「(1)必要である」とする者が多い。一方、薬学は「(1)必要である」とする学生が8割に達するのに、前問で「(1)常時使用している」割合が日文、教育に比べて顕著に少ない。これはロッカーに入れたいものがあるのに入れられないということではないだろうか。ロッカーのサイズは適切か、PCのような貴重品で、セキュリティに不安があるといった心配があるのではないか、別の調査が必要である。また、歴史、人社、スポ健で「(3)なくても不便ではない」とする学生が2割以上ある。個人ロッカーのサイズや設置場所と彼らの授業教室の位置などに問題はないか検討する必要がある。

【Ⅷ：健康状態】

問 現在の健康状態を教えてください。

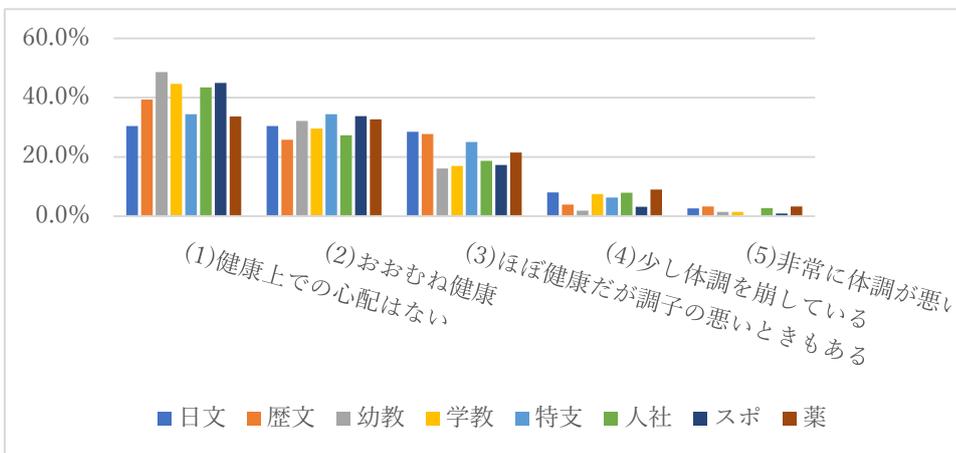
1) 全学の分析



<考察>

本学が学生の健康管理について、どの程度の意識を有しているかで、見解が大きく左右される。

2) 学科間比較

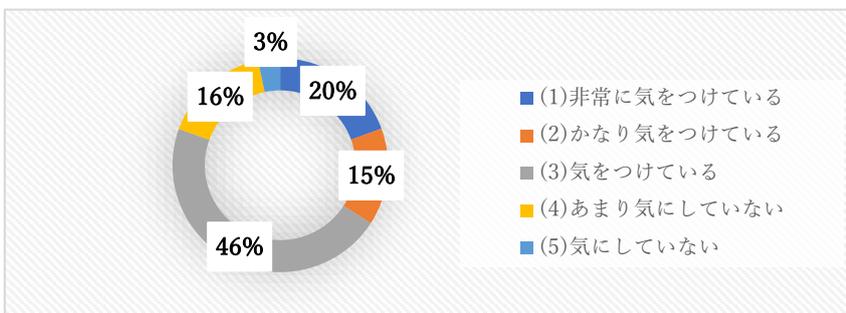


<考察>

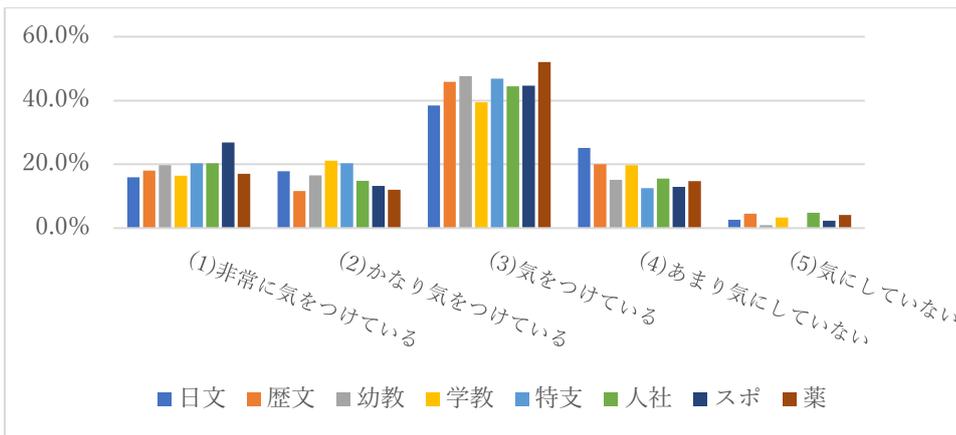
学科間での違いはほとんど見られない。

問 体調管理に気を付けていますか。

1) 全学の分析



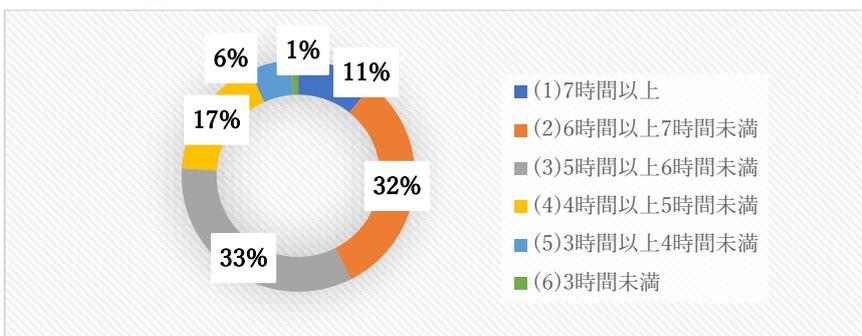
2) 学科間比較



<考察>

学科間での違いはほとんど見られない。「(1)非常に気をつけている」「(2)かなり気をつけている」「(3)気をつけている」の合計は、全学科で7~8割に達しており、健康に関心が向けられているといえる。

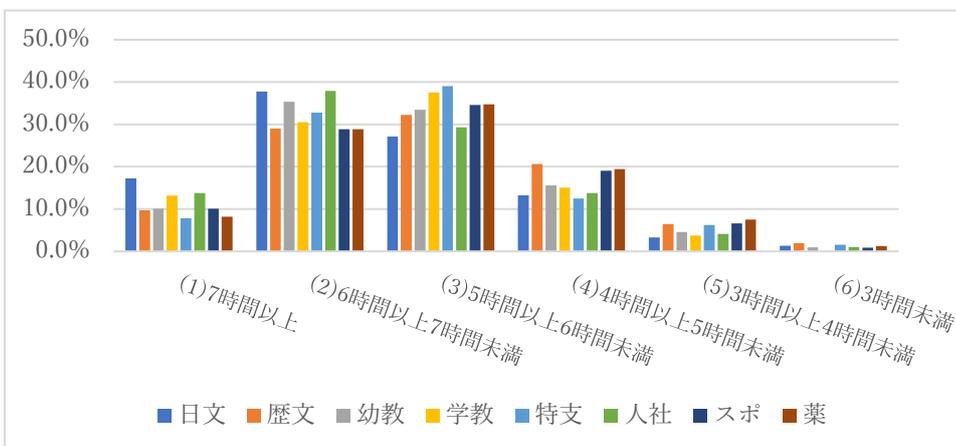
問 1日の睡眠時間はどれくらいですか。



<考察>

アルバイトの時間値の問題と呼応している。仮に「(1)7時間以上」を7、「(6)3時間未満」を3、その他は中間の数値として平均すると平均値 5.67、最頻値 5.5、中央値 5.5 となった。医学的に提示された推奨睡眠時間は7時間で、本学平均とは1.5時間の開きがあるが、より健康面に留意するのであれば、教育構造との関係性について、議論する必要がある。

2) 学科間比較

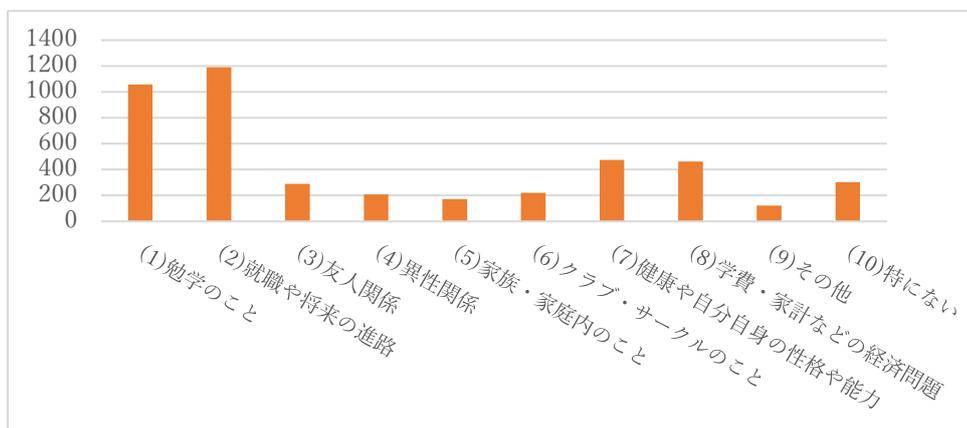


<考察>

学科間による大きな違いは見られない。健康維持という観点から、「(5)3時間以上4時間未満」及び「(6)3時間未満」と回答した学生については、心の問題など、眠れない理由が潜んでいる可能性も考えられるので、個人的なフォローが必要だと考える。

問 今悩んでいることはありますか（複数回答可）。

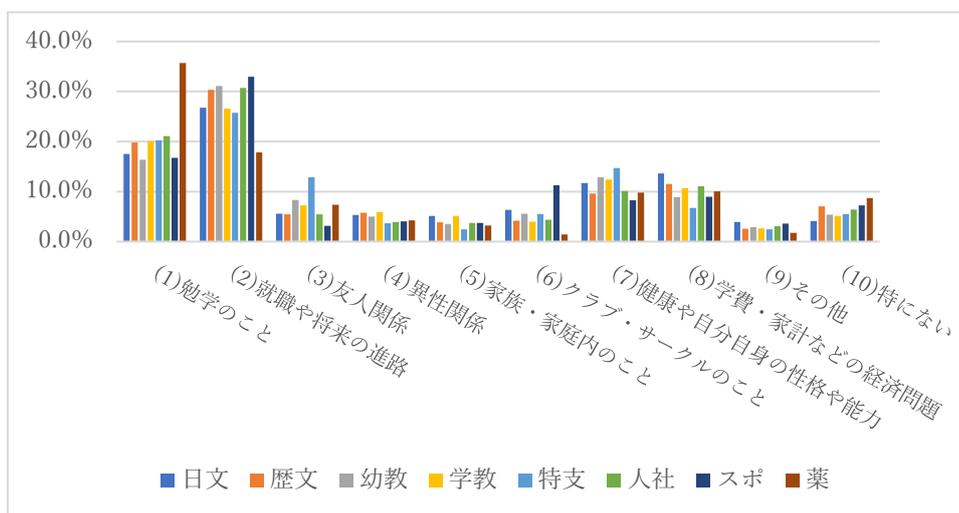
1) 全学の分析（回答人数）



<考察>

選択肢の(1)は教務的の案件、(2)は就職進路的の案件であり、この2つが突出して多いことを本学が認識して対応することが必要とされる。(3)～(8)は学生生活的の案件で、突出したものは無いが、合計すると相当数になる。これらの案件については、大枠で考えるのではなく個々の学生への対応が必要とされよう。専門的に対応する部署の設置を検討する時期となっているのではないかと考えられる。

2) 学科間比較（各学科の悩みの項目の合計値に対する%で比較）

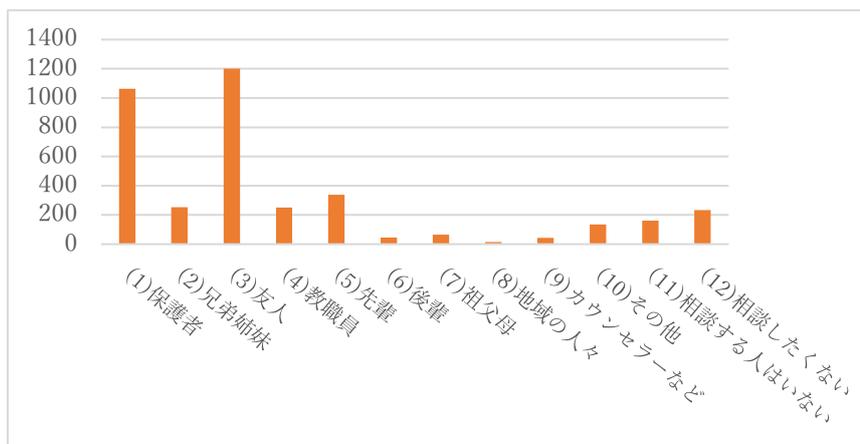


<考察>

薬学では他学科と比較して「(1)勉学のこと」の悩みが突出して多い。この選択肢を選んだ学生の割合を入学年度ごとに調べたところ、79.2%、72.1%、68.1%、73.1%、63.5%、77.3%（2018～2013年度の順）といずれの年度でもほぼ7割に達した。薬剤師国家試験合格の目標が厳しいことに1回生から悩んでいることが明確になった。一方、特支で「(3)友人関係」に悩む学生が他学科に比べ多いこと、スポ健で「(6)クラブ・サークルのこと」に悩む学生が他学科より多いことには注意が必要である。

問 誰に相談しますか（複数回答可）。

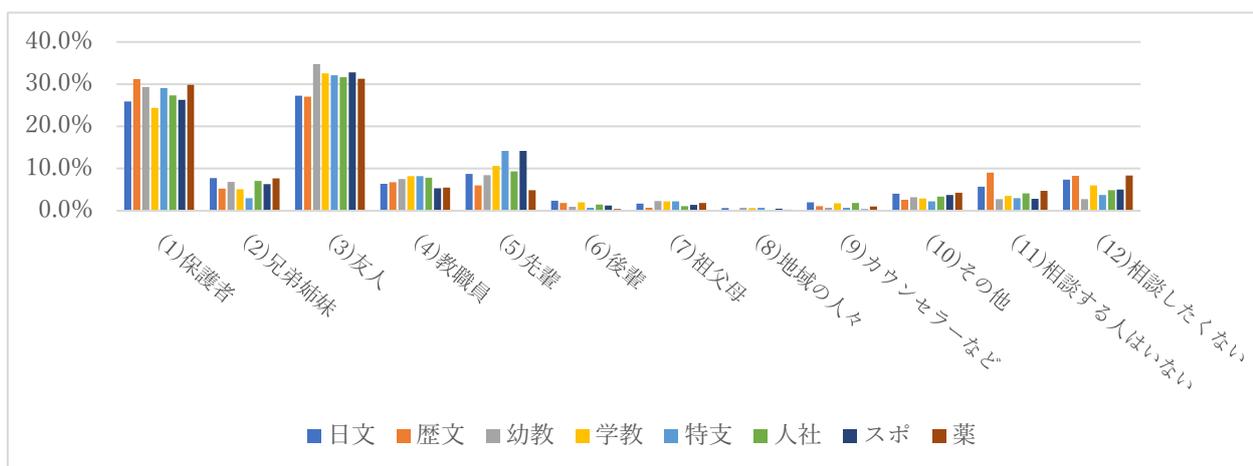
1) 全学の分析（回答人数）



<考察>

結果から見て、アジア的日本的な家族を中心として、社会生活の特性をうかがうことができる。ある意味、本学の学生と家庭の関係は良好であると言えよう。これらの事から、大学は学生だけでなくその家族を含めて対応することが肝要であると考えられる。

2) 学科間比較（各学科の相談相手合計数に対する%で比較）



<考察>

学科間の違いはほとんど見られなかった。

総合考察

今回の調査では、過去2回と同様に全学の分析を行い、さらに学科間の違いに着目して分析を深めた。その結果、質問内容によって、学科の特徴がはっきり現れたものがあった。特に「自習場所」「課外活動団体への参加」「ボランティア活動への参加・意欲」「1週間当たりのアルバイト時間」「食堂の朝食を食べたことがあるか」「個人ロッカーの使用頻度・ニーズ」「勉学の悩み」においては、学科間の数値の違いが明確になった。その理由を類推し易い項目については、改善に着手すべきである。一方、「1週間当たりのアルバイト時間」の詳細、「個人ロッカーの使用頻度・ニーズ」の学科による差異については、推測の域を出ていない。これらに関しては、さらに詳細な調査を行う必要がある。

参考文献

(1)日本学生支援機構，“平成28年度学生生活調査結果”，平成30年3月，URL：
https://www.jasso.go.jp/about/statistics/gakusei_chosa/_icsFiles/afieldfile/2018/03/19/data16_1.pdf
(2019.3.12 確認)

以上